

連載

日本の観光洞 -38

水島 明夫 (MIZUSHIMA, Akio)

高知県 Kouchi - ken

四国の最後、3回目は、日本の3大観光洞といわれている“龍河洞”の高知県です。

なにせ中央構造線の南側、外帯です。フィリピンプレートによって運ばれてきた付加体が、北東～南西の軸を持って帯状に綺麗に並んでいる。北から順に、三波川帯、秩父帯そして四万十帯だ。

三波川帯には穴が仁淀川町やいの町に20ほど。昔、吾北村から依頼されて観光洞にならないかと“柳野洞”の調査をしたことがある。石灰質片岩にできた穴で、裂隙が大きくなったような45mほどの小さな穴。変成岩からなる三波川帯では、観光洞は厳しいか。

次が、メインの秩父帯。100ほどの洞窟が高知ケイブフェスティバル1991が行われた時に作られた「高知県の洞窟」に記載されている。いろいろな穴がある。高知市土佐山の“菖蒲洞”や“桑尾の風穴”のような比較的規模の大きい穴。故山内浩先生の芸術とも言うべき美しい測図の津野町“稲葉洞、不入洞・美谷古洞”。また佐川町の“不動ヶ岩屋洞窟”のような洞窟遺跡。

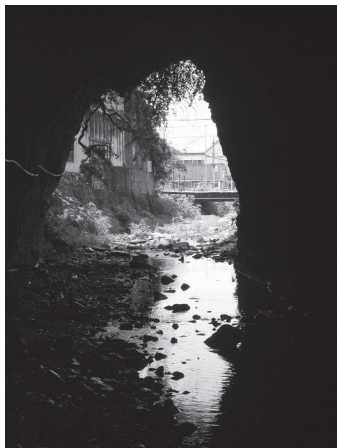
珍しいのは、2001年自動車トンネルを掘って出現した土佐市の“天崎鍾乳洞”、トンネルの中に橋を架け保全、家の引き戸式玄関のような洞口が堂々とある。



天崎鍾乳洞洞口トンネル内に開口

なお、今回もスママセン。Caving Journal No.2の日本の観光洞連載第1回のリストでは、“52 猿田洞”を観光洞としていた。しかし“猿田洞”の営業はすでに終わっており、さらに村の管理洞となっているが、照明も壊れ、それなりの装備がないと入れません。よって観光洞リストからは除外、52番は欠番です。さて、そんな秩父帯の穴の中で別格なのが、三宝山帯の“龍河洞”でしょう。

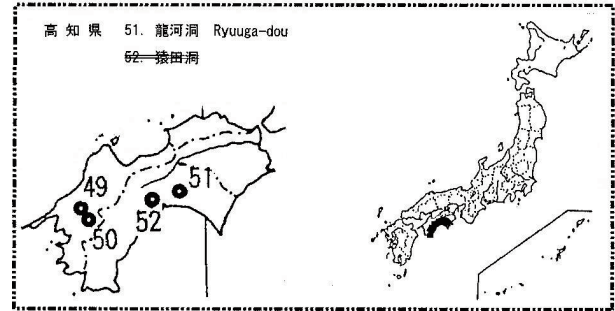
最後に、高知県の大半を占める四万十帯は、残念。石灰岩の分布がほとんど無く、石灰洞も



伊尾木洞

数個か。しかし、皆さんに是非行ってもらいたい穴がある。安芸市、国道55号の側道のすぐ横、車から降りて30秒の“伊尾木洞”だ。この穴というか川がえぐったトンネルの全長は30m。しかし抜けたところの雰囲気、穴好きにはたまらない場所。シダ植物群落で国指定の天然記念物になっている。石灰洞ではないが、溶食形態があったりして、あの雰囲気は飽きません。

なお、長い海岸線の高知県、海食洞がいくつか報告されているが、省略。



51. 龍河洞 Ryuuga-dou

縦横複合洞・全長約2,300m

<特 色>

石灰岩の岩峰三宝山の中に、縦横複合して迷路状に洞窟が発達している。大きくは次の3つに分けられる。水源となるブラインドバレーの上龍河からの水によってできた観光洞部の東本洞と中央洞、そして別水系による西本洞である。

龍河洞探検の主、故山内浩先生によれば東本洞に支洞が15、中央洞に4、そして西本洞に7本の支洞があり、総延長は2,150mとか。洞口は三宝山麓に2、山腹に4つの計6、そのほか山上に接続が考えられる堅穴が2つあるとか。

洞窟の形態は、山内浩等が工夫して登った「記念の滝」を境に、上部洞穴の幅の広い二次生成物の発達した空洞と、峡谷状の幅の狭くて浸食形態が顕著な下部洞穴に分かれる。洞内には滝が20ほどあって、最落差の滝は11mとか。

上部洞穴の出口付近は、弥生時代の洞穴穴居跡で、出口付近の「神代窟」がリビング、その奥がダイニングキッチン第二室、水源が第三室とリッチに使っていたよう。フローストーンに覆われた弥生式土器の「神の壺」は必見、感激ものです。



神の壺

洞窟生物が詳しく調べられているのも、龍河洞の特長。洞内生物

102種が天然記念物に指定されているという。そう言えば、リュウガ・・・と言う生物が多いような。